

クラスを超えた学び合い (2)
—日本人学生英語クラスと留学生日本語クラス間交流—

野 沢 智 子・坪 田 典 子

Learning from Each Other Beyond the Classes (2)
—Interclass Communication Activities
Between Japanese and International Students at Bunkyo University—

Tomoko NOZAWA, Michiko TSUBOTA

Abstract

Throughout Japan, the number of the international students has continued to increase in the past decade. However, interaction between international and Japanese students on campus is said to be little. This has also been true in European and American universities for a long time. This study explores the possibility of cross-cultural communication among international and Japanese students through interclass communication activities. These activities were conducted between a Japanese language class and an English language class conducted at Bunkyo University in the spring semester of 2004 as the second trial following the previous semester's activities. The purposes of this exchange between these two classes were: (1) for students to seek for directions in their research, while being stimulated by the discussion among the participants, (2) to enhance the interactions between the international students and the Japanese students, and (3) to motivate them to learn each target language by making oral presentations. During the course, these two classes had three exchanges: midterm presentations by the Japanese students, theme presentations by the foreign students, and a debriefing session about each other's research in small groups. The Japanese participants were especially stimulated by these activities to work further on their research and to seek more exchanges with the international students. According to the survey conducted at the end of the course, both the international and the Japanese students claimed that there are not enough chances to interact with each other on campus. Furthermore, they said they hope that they will be given chances to do so in class activities.

I はじめに

今日、多文化共生の時代を迎えて、経済、社会の様々な面でグローバル化が急速に進展し、人、もの、情報がボーダレスに行き交い、国際的な相互依存関係がますます深まってきている。人の移動を

見ると、日本における受け入れ留学者数・外国人登録者数¹⁾は毎年最高記録を更新し続けており、いずれも今後ますますの増加が見込まれている。経団連が、2004年に「外国人受け入れに対する提言」²⁾で「多文化共生庁」の創設を提案するほど、日本社会は多文化を考慮し重視していかなければならない社会となっている。この多文化社会で他者と共生し、さらにグローバル化の進んだ国際社会の一員として生きていくためには、異文化理解力とコミュニケーション能力、コミュニケーションする態度、それらに加えて、英語コミュニケーション能力を備えた日本人の育成が求められ³⁾、留学生交流の促進が要請されている⁴⁾。

本稿の執筆者たちは、2003年度秋学期に留学生日本語クラス(以下留学生クラス)と日本人学生英語クラス(以下日本人クラス)間で、留学生の訪問スピーチを核にした交流活動を試みた。そのきっかけは「留学生クラスがスピーチの聴衆を求めていた」ことに日本人クラスが呼応した形で始めたものだが、留学生だけではなく、日本人学生も留学生から多くを学ぶことができた。言語習得の面での刺激を得、異文化理解へのステップを踏み、自文化・自己への認識を新たにした日本人学生を見て、執筆者たちは、日本人学生にこそ留学生との交流の機会が必要であると認識した。本稿では、引き続き2004年度春学期に行った留学生クラス(日本語D)と日本人クラス(CALL204)間の交流活動を紹介することにより、大学における留学生と日本人学生間の交流を考えていく一助としたい。

II 留学生の受け入れ状況

II-1 留学生数の推移

ここでは、日本全体と文教大学における留学生の受け入れ状況を概観する。日本における留学生数は、80年代中葉の「留学生受け入れ10万人計画」以来増加し、[図1]⁵⁾にあるように、その伸びは、とりわけ2000年前後から急激に上昇しており、2003年度には10万人を超えている。文教大学では、1988年、文学部で初めての留学生を受け入れたのを皮切りに、留学生数が増加し、一時下降傾向が見られるが、近年再び急上昇している。留学生を出身国・地域別に見ると、日本における留学生は、全地球的に広がっているが、アジアからの留学生が全体の93%である。文教大学の留学生は、[表1]⁶⁾にあるように、約98%の留学生がアジアから来ており、その大半が中国、韓国、台湾からの留学生で占められている。2004年度、文教大学湘南校舎における留学生数は110名で、その内訳は、中国、韓国、台湾、マレーシア、香港、イラン、インドネシア、ミャンマーとなっている。

1) 外国人登録者数は毎年記録を更新し続け、2003年末には過去最高の191万人を超えた。10年前に比べると45%増加し、今や外国人の日本総人口に占める割合は1.50%にあたる。法務省2004.6 『平成15年末現在における外国人登録者統計について』 <http://www.moj.go.jp/PRESS/040611-1/040611-1-1.pdf> (2004/10/03アクセス)

2) 経団連2004.4『外国人受け入れ問題に関する提言』で、留学生の受け入れの意義を唱え、「留学生の質的向上と日本国内における就職の促進」を提言している。(2004/10/03アクセス) <http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2004/029/index.html>

3) 文部科学省2003.7『英語が使える日本人育成のための行動計画』ではグローバル化の進展の中で、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」ことを目標にあげている。http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/030318a.htm (2004/10/03アクセス)

4) 文部科学省2004.7『我が国の留学生制度の概要平成16年度版』では、新たなる留学生政策を発表し、双方向の留学生交流の推進を基本政策の一つとしている。(2004/10/03アクセス) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/05/04071201/mokuji.htm

5) [図1]は、文部科学省 2004.12『留学生受入れの概況(平成16年版)』の留学生数の推移のデータと文教大学庶務課提供のデータより作成。

6) [表1]は、文教大学国際交流課の提供による。

図1 外国人留学生数の推移

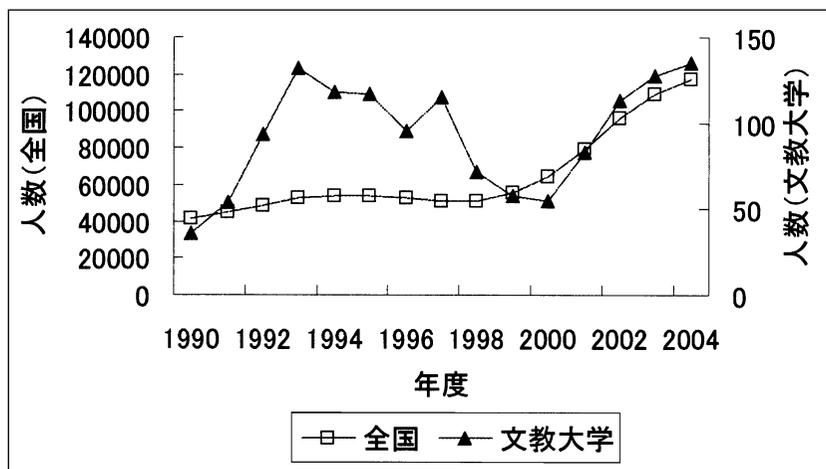


表1 2004年度 文教大学外国人留学生在籍数・国籍別一覧

国籍	性別		学科別										国別計
	男	女	人間科学	臨床心理	日文	英文	中文	広報	経営情報	情報シス	国際関係	国際コミ	
中国	40	57	1	1	13	0	0	6	22	10	24	20	97
韓国	4	16	1	0	4	0	2	3	0	0	9	1	20
台湾	2	8	0	0	2	0	0	0	2	1	5	0	10
マレーシア	0	3	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	3
英国(香港)	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2
*ニュージーランド	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
*ドイツ	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
*ブルガリア	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
イラン	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
インドネシア	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
ミャンマー	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計	48	90	2	1	21	2	2	9	26	13	39	23	138

*協定校派遣留学生

II-2 進まないキャンパスでの留学生交流

キャンパスに留学生が増えることにより、留学生と日本人学生が同じ授業を受けることは当然のことで、日本人学生と留学生との交流も自然に行われるかのように期待してしまう。ところが、近年、留学生数は増え続けているものの、多くの研究者が指摘しているように、大学キャンパスにおける留学生と日本人学生の交流は進んでいない状況である。例えば、[横須賀2003:29]では「相互の接触が非常に少なく、物理的に乖離している状況」と述べられており、[坪田・野沢2004:126]でも「国際学部なのに他の国の人たちとコミュニケーションとる機会があまりない」という学生の言葉が紹介さ

れている。そして、[浜田ら2001:104]は、「実質的に多文化状況であるキャンパスにありながら、惜しいことに、その利点を十分活かした教育・学習が行われていないのである」と指摘している。

では、交流する意思があるかという点については、[横須賀 2003:34]によると、「全般的に留学生の方が日本人学生よりも異文化の人間との関係構築に対する欲求が強いことを示唆しており、日本人学生は自国文化の中で生活しており外国人との交流は生活の実利に直結していないため、多文化社会で生きることの意識は低く、その必要性さえ感じていない学生もいる」。必要性を感じない原因の一つには、同質、同年齢集団の中で学校教育を受けてきた日本人学生は、異文化との接触をする機会に恵まれないことがあげられるであろう。また異文化との直接の接触が少ないと、[新倉 1996:31]が指摘するように「留学生と日本人との接触の機会の少なさから、接触の不足が双方のステレオタイプの思い込みを生み、それが原因で思わぬ誤解、トラブルが生じる」。ことにもつながりかねない。

アジア系留学生と受け入れ側の日本人学生の交流について、[坪井1993: 102]は「日本の留学生政策は親日家をつくるという目的に必ずしも成功していない」と指摘している。最近上海のあるリサーチ会社が行った調査⁷⁾によると、中国人の対日感情は悪いとされており、中国で古くから言われていた言葉「留美的親美、留日的反日」(アメリカに留学した者は親米派になり、日本に留学した者は反日派になる)が、今も現実味をもって語られている([段躍中2003][孫長虹 2004])ことは、留学生が増えている中で、悲しむべきことである。

このような状況を打開する方策はどういうものであろうか。[坪井1993]によると、「欧米の研究でもキャンパスで直接接触しあう留学生と自国民学生との間には自発的・自然的相互作用にまかせる限りどの国でも予想に反して親交が深まらない」また「大学が適切な交流の機会を提供していないからこそ、多くの学生が消極的レベルに留まっている」ことも指摘されており[花見1999:3]、「相互理解の生起する仕掛けを作る必要があるし、仕掛けをつくるのを助けるシステムが必要」とされる[箕浦2000: 13]。[坪田・野沢2004: 130]も、「クラス間交流や日本人学生の参加を得て、「教室」を交流の場として活用していく授業がもっと行えるようになるには、そうした交流が可能となる仕掛け作りが検討される必要があるし、仕掛け作りを援助するカリキュラム等、制度面での取り組みも期待される」としている。

Ⅲ 先行研究と本稿の特色

留学生と日本人学生との交流活動に関する実践・研究は、日本人学生、地域住民を取り込む形でさまざまな機関において様々な形態で行われている。その多くは、留学生担当者が日本語クラスに、「日本語教育」、「外国語教育」、「異文化コミュニケーション」に興味のある日本人(学生)の参加を求めるものか、もともと日本人学生と留学生混合の「多文化クラス」でなされた研究である([杉本1999][田崎 2003][梶原2003][金城1998])。

それらの多くは教室内のコミュニケーションにとどまっており、教室を超えた交流まで発展していないのが現状である[徳井2000: 22]。複数の担当者による教室を超えた合同クラスの例として、ELPとJLPの合同クラス[鈴木・島崎2002]、「基礎セミナー」と「日本語」の乗り入れ授業[浜田ら

⁷⁾ 2003年から2004年にかけて行われた上海新泰信息咨询有限公司(上海サーチナ)による中国の一般消費者を対象としたオンライン調査(サンプル数 5000)「2003・2004中国人の日本に対する意識・イメージ調査」で、日本に親しみを「強く感じている」「感じている」が合わせて12%、日本に対して親しみを感ぜない割合が44%、中日関係が良好とする割合は12%と報告されている。<http://marketing.searchina.net/japan/2003.html> (2004.10.3アクセス)

2001]があるが、非常に限られている。また、留学生と日本人学生両者の視点から分析されたものはほとんどなく、なかでも日本人学生側の視点を重視した研究は見あたらない。

交流⁸⁾は、双方向である限り両者に影響を及ぼす相互作用である。その意味で、交流は、留学生側にとってはもちろんであるが、学生の多数派を占める日本人学生側にとっても同様に重要であると執筆者たちは考えている。本稿は、この日本人学生側の視点を重視した立場から交流を捉え、日本人クラスと留学生クラスとのクラス間交流が分析されている。

IV クラス間交流

この活動は、当該2クラスが協同で行うことによって、日本人学生と留学生が交流できる機会を作り、活動を通して、双方の学習言語による口頭発表、討論の能力の育成と多文化コミュニケーション能力を養成することを目指している。本稿では、このクラス間交流を、CCC (Cross Cultural Communication) と呼び、2004年度春学期の交流活動をCCC04春と、昨年2003年度秋学期の交流活動をCCC03秋と呼ぶこととする。

IV-1 CCC03秋の反省・課題とCCC04春のねらい

CCC03秋は、留学生の訪問スピーチを核とした活動であったため、日本人学生は留学生のスピーチに刺激されて多くを学んだものの、留学生が達成感、自信を得ることができたのに比して、日本人学生の方は交流の主体者になりきれなかった。また、留学生は、本当に話したいトピックでスピーチできなかったという報告もあった⁹⁾。CCC03秋は気を配りながら本音を出さない友好的な交流を行ったともいえる。そこで、CCC04春は、CCC03秋の反省と課題から、留学生と日本人学生がともに交流の主体となり、できる限り、本音に近いことが言えるような交流をねらいとした。そのために、扱うテーマ、活動形態、使用言語に留意をして活動を行った。

CCC04春は、各ホームクラスでのリサーチテーマを視野に入れて行われた。活動のねらいは、(1) 互いのリサーチテーマを共有し、議論し合うことによって、リサーチへの動機づけを促し、方向づけに影響を与えること、(2) 政治的、社会的、国際的な話題にコミットすることにより議論を深化させること、(3) 各々の学習言語で口頭発表することにより、それぞれの目標言語の学習動機づけを高めること、である。

双方の授業は金曜日の3時間目に行われており、共通の時間の一部を使用して、対面活動を3回、計約2コマ分の時間が充てられた。活動内容は、第1回は日本人学生のリサーチの中間発表、第2回は留学生のリサーチテーマ発表、第3回はリサーチ報告会と意見交換をした。第1回と第2回はクラスの全体活動で、第3回は小グループに分かれて行った。参加者は回を追いながら、テーマ選択、リサーチの方向性などに影響を与え合った。

⁸⁾ [矢ヶ崎 2004] は、交流について次のように述べている。「そもそも交流とは、異なる組織や系統に属するものの中で人が行き来することであり、知恵、技術、情報等の交換が行われる。行き来する本人にとって、交流とは、自分と異なる他者との出会いである。他者と出会い、自分との違いに気付き、己を再認識する。そして、他者との対話を重ねるなかで、葛藤や対立を超えて、理解や協働へと関係性を高め、お互いを向上させていくことが、交流の効果として期待される」

⁹⁾ CCC03秋の留学生の感想による。[坪田・野沢2004: 128] 参照。

Ⅳ－２ 対象となるクラス

日本人学生英語クラス：CALL204

CALL204は、コンピュータと英語を使いこなせる学生の育成を目標としている国際学部の英語選択科目で、週1回、インターネット接続されたCALL－Computer Assisted Language Learning = コンピュータ支援言語学習環境－教室で行われた。受講生は1年1名、2年5名、4年1名の計7名で、CCC03秋の交流活動経験はない。

このクラスでは、以下の3つが主な活動であった。（１）“How could we make a more peaceful world?”という全体テーマのもとで、自分なりのテーマをインターネット検索を中心としてリサーチし、デジタルリサーチペーパーを仕上げる（1500語以上）（２）インターネット上での無料のディスカッションボードサービスNicenetを利用した韓国の大学生との英語による意見交換をする（３）コンピュータを利用して自律的に英語学習をする。

リサーチのクラス全体テーマに即して、“War against Terrorism” “Child Abuse” “Guns and American Society” “Racial Discrimination” などにかかわる資料やサイトを提示する一方、インターネットを利用した交流として、韓国の大学生とリサーチや日韓関係にかかわる問題についてディスカッションボードで話し合いを進めていた。参加者は、これらの授業での提供材料と各自のインターネットでの情報検索、また韓国の大学生とのネット交流を通じてリサーチを進めていき、中間発表にいたった。

留学生日本語クラス：日本語D

日本語Dは、外国人留学生が原則として履修しなければならない日本語科目のひとつである。留学生は1年次に日本語A、B、Cを履修しており、これは必修科目としては最後の日本語科目である。受講生は、14名で、2年生11名、3年生3名であった。国・地域別では、中国9名、韓国4名、台湾1名であった。年齢的にも均一集団ではなく、大学卒業者や職業経験者が大半で、高校卒業後すぐに留学している場合も日本語学校を経由して入学している。そのため、日本人学生と比べれば、全体として年齢的には上であり、かつ年齢層に幅があり、社会経験が豊富なことが挙げられる。

日本語Dのクラスにおける主な目標は、言語運用力、とりわけ、アカデミック・ジャパニーズの観点からの日本語能力を高めることである。クラスでは、基礎的な学習に加えて次の活動を行った。前半は、（１）留学生の出身国・地域と日本との関わりについて、好きなテーマを選びレポートを書く（A4、2枚程度）。後半は、（２）「人類の一員として考える」という大枠のもとで、リサーチ・テーマを決めて、調べ、それをクラスで発表する。その際、最低1冊の本を文献として読み、クラス発表ではレジメを提出し、最終課題のレポートとしてまとめる（A4、2枚程度）。

日本人クラスとの交流活動は、（２）の活動と重複して行われ、交流活動の2回目でテーマ発表が行なわれた。日本語Dを履修している学生の約半数は、2003年度に執筆者担当の日本語Cを受講している学生であり、CCC03秋で、日本人学生とのクラス間交流を経験している。

Ⅳ－３ 交流活動の流れ

第1回交流活動 日本人クラスのリサーチ中間発表

2004年6月4日、日本人学生が、“How could we make a more peaceful world?”という全体テーマのもとに中間発表を行った。取り上げられたトピックは、“The Racial Discrimination,” “Child

Prostitution in Asia,” “Education in Developing Countries,” “The Nuclear Weapons,” “Child Abuse,” “Freedom of Expressions,” “Ashura,”である。

留学生クラスは、日本人クラスを訪問して、これら日本人学生7名のリサーチ中間発表を聞き、質問や意見を交わした。発表の際の使用言語は英語で、コンピュータのプレゼンテーションツールでリサーチ内容を提示しながら発表した。発表後の質疑応答は、日本語で行い、留学生による評価表の記述も日本語で書かれた。翌週、日本人クラスは評価表を渡され、それを読んで中間発表について感想を書いた。留学生クラスも同様に翌週感想を書いた。

第2回交流活動 留学生クラスのリサーチテーマ発表

2004年6月11日、授業時間の一部30分程度を使って、日本人学生が留学生クラスの教室を訪問し、留学生のリサーチペーパーのテーマ発表に参加し、質疑応答を行った。留学生のテーマの選択が、日本人学生クラスのリサーチ中間発表を聞いた後に行われるように設定されることにより、日本人学生のリサーチテーマや内容からの影響、また、それらとの関連性が考慮された。留学生のテーマは、「在日外国人」「中・日・韓における歴史認識」「同情と平等」「水質について」「地球の温暖化」「日本人の宗教」「中華人民共和国について」「イラク戦争－韓・日・米の関係について」「地球の水が危ない」「日本人の宗教慣習」「少数民族の権利」「中国人の歴史認識」「地球環境」である。

第3回交流活動 リサーチ報告会

春学期も終了間際、2004年7月2日に日本人クラスの教室で、1コマの授業時間すべてを使って、留学生と日本人学生が小グループに分かれ、リサーチの仕上げ前の議論を行った。グループ分けはくじびきで日本人学生1名と留学生2名の3名グループを7組作った。使用言語は日本語で、自己紹介のあと、リサーチの内容について簡単に報告をし、質疑応答を行った。その後は、各グループメンバーのテーマを中心にそこから自由に発展させて、話し合いを行った。この交流活動の記録は、話し合い後、授業時間内でグループごとに記録し、授業時間の終わりに各人が感想を書いた。

Ⅳ－4 クラス間交流 - 学生のデータから -

ここでは、CCC04春の第1回交流活動における学生たちによる相互評価表のコメントと感想、第3回交流活動におけるリサーチ報告会の記録と感想、さらに、全3回の交流活動を終えた事後アンケートをデータとして使用する。データの引用に際しては、日本人学生は(日)、留学生は(留)と記し、その後に個人を表示するアルファベット(仮名)を記入する。引用中の()内は執筆者たちによる。なお、意味が通じる限り、引用は原文のまま記すこととする。

ここでは、CCC04春のクラス間交流を、初回のCCC03秋のそれと対照して出てきた次の3つの観点、(1)交流の深化、(2)ホームクラスとの関わり、(3)交流を希求する気持ち、から分析していきたい。

Ⅳ－4－1 交流の深化

留学生と日本人学生の交流をどのようにしたら深めていけるのかを検討するため、CCC04春を交流の深化という観点から、深化に影響を及ぼしたと考えられる、内容(テーマ)と、活動形態(活動の流れを含む)、使用言語をとりあげて見ていく。

内容（テーマ）

CCC04春の交流活動の核となった発表テーマについて見てみよう。CCC03秋では留学生が無難なテーマを選択していたため¹⁰⁾、留学生と日本人学生との間で葛藤が表面化することはなかった。しかしながら、CCC04春では、Ⅳ－３－１にあるように幅広い見地から議論を呼ぶテーマが選ばれていたため、交流活動の初回からぶつかり合いや齟齬が生じる場面があった。次の引用は、ある日本人学生の発表への意見交換の中で齟齬が生じて、双方向のコミュニケーションが成り立たなくなった例である。第1回交流活動後に書かれた留学生と日本人学生の感想からその部分を引用する。

（留KC）人間はすべて平等であると言われているのになぜ我々外国人が日本に来たら差別されるのだろうか。たとえば部屋を借りる時、バイトをする時、日本人と同じで見てくれない。またなぜ日本で生まれ、日本人と同じ教育された外国人も差別されるのだろうか。

（留JG）日本で生まれ日本人と同じように教育を受けて、日本で働いて年金（税金）まで払っている在日韓国人がなぜ差別されているかをもっと考えてほしい。

（留MM）日本では人種差別が存在していると思う。そして日本人が心から英語ができる人に対して親しい目で見ると。欧米へ希望を寄せる。

（留HL）今回、学校内の日本人学生と交流して授業に参加させていただき、英語のレジュメと共に日本・韓国・中国の考え、思いを話すことができました。授業はほとんど英語で行い、理解出来ないこともあったんですが、日本の学生が見ている視点と、実際、その国（アジア）の人々が持っている事実には差がある事を（が）わかりました。それはなぜなのか。アジアの歴史的な問題を一方的な（に）解析（解釈）してしまう事。一体どこからその違いが生まれていたのか（いるのか？）21C生きているわかものだち（若者たち）はなぜ過去の事を自分たちの方式に解析（解釈）して行きたいか。どういう故でさせてくれないのか（どういう理由で歴史的な問題が理解できないのか）。痛ましく思い残念でした。

（HAT）なんかがっかりした。自分にもがっかりだけど、コメントにもがっかりな感じだった。差別というよりは、何だか人って自分のコトしか考えないんだなと思った。だから差別があるのかもしれない。それに同じ日本人でも言葉だけで伝えるコトはとても難しいことだから、お互いに自分で勝手に解釈して誤解して気持ちのズレ違いが差別につながるかも。

上述したのは、双方向のコミュニケーションが上手くいかず、齟齬がそのままになったケースである。この他のケースでは、異なった意見が齟齬にならず、かえってその後のリサーチを進めていく上で視野が広がったり刺激となったりしている¹¹⁾

一方、国際的な問題を多文化的状況で議論することは、大学生として、とりわけ、国際学部にも所属する学生として重要であろう。学生からはそのような議論の重要性や議論をした充実感が寄せられた。

（留SH）私は国際学部の学生として国際的な問題を知らないと、国際学部から卒業できた人とは言えないでしょう。現代の世界に、いろいろな問題を存在しているので、私たちはどんな

¹⁰⁾ CCC03秋の留学生のスピーチテーマは [坪田・野沢2004:120] 参照。

¹¹⁾ 次のⅣ－４－２－１における引用。

ような理解なのか、どんな意見を考えているのか、国際学部として必要な所だと思います。
(日BH)「…世界に目を向けることはほんの少しでも楽しい。…」

活動形態

CCC04春では、3回の対面活動をすべて2クラス合同で行い、全体で個人の発表を聞く活動と、小グループで意見交換をする活動形態を組み合わせた。この少人数でのグループ・ディスカッションという形態で、互いに相手を身近に見ながらの活動が行えたことは、交流の相手を、国や文化といった全体（集団）で見めるのではなく、一人の自己と一人の他者として向き合うことを促した。

これは、CCC03秋の交流において、留学生と日本人学生両者とも、相手を個人としてではなく、その背後で個人を規定している〇〇人といった集団で捉えるという認識に留まっていたのとは対照的である。CCC04春では両者の背後にある集団が前面に出るのではなく、互いに顔の見える個のレベルへと向かっていく交流が可能となったと考えられる。

次の引用で述べられている「構図」は、交流を通して個人レベルにおける新しい認識が形成されたことを示している。同時に、言語の面で、両者に共通言語である日本語でディスカッションが行われたことの重要性も述べられている。

(日CH) 今回いろいろ話してみて、彼らも自分と同じ考えを持った人たちなのだと分かった。日本人と外国人という構図ではなく、日本をよく知っている人間（自分）と中国をよく知っている人間という構図が自分の中で作られた。そして、このプロセスに必要なのは、やはり同じ言語で自由に話し合えるということだと思う。

次の引用は、留学生や日本人学生がお互いに〇〇人という属性で捉えられるのではなくて、個人によって判断されることに気づいた例である。

(日AT) 日本人は何でこうなの？って聞かれても、そんなの私だって日本人だけ知らないよって思うことばかりだった。仕方がないコトだけど、一人の人間で国全体を見がちだなと思った。私もだし、〇〇に台湾の話の聞くと、台湾全てがそうなのかと思うけど、実際それは台湾でも一部である。文化などで決まるんじゃなくて、性格で決まるんだなと思った。日本人は思ったコトいえないのは全員じゃないし、アメリカ人は個性を求めるのは全員じゃない。

以上、少人数でのグループディスカッションを通して寄せられた学生の感想を見てきたが、交流の深化には活動の形態のみならず、活動の流れが及ぼした影響も無視できない。CCC04春では、交流活動は、日本人学生の中間発表、留学生のテーマ発表、その約1ヵ月後の最終課題提出の時期にリサーチ報告会という流れで、3回にわたって行われた。その一連の流れの中で、学生たちがリサーチのテーマを調べて参加するというプロセスが作られたため、そのことが議論を豊かにし、交流活動の深化に影響を及ぼしたといえるであろう。

使用言語

使用言語の面では、第1回交流活動、日本人学生中間発表は英語で行われたが、発表後の議論は日本語を中心として行われた。続く第2回の留学生テーマ発表と第3回リサーチ報告会のグループディスカッションも日本語で行われた。

両者に共通の日本語を使用したことが議論の活発化へとつながり、交流の深化を促したことは否めないであろう。次は、第1回中間発表後に書かれた留学生の感想からの引用であるが、議論に際して日本語を使用したことの重要性が述べられている。また、日本人学生の英語での発表を聞いて、英語の必要性が述べられている。英語の重要性に関してはこのほかにも多くの留学生が言及していた。

（留 RM）おもしろかったが、英語で発表から、難しかった。コミュニケーションという効果がないと思う。留学生として日本語の勉強が大切である。だから、日本語でコミュニケーションするのほうがいい。交流というのは、相手の意味を理解するのが必要である。これはコミュニケーションの前提条件であると思う。両方もわかりやすい言葉を使って、話すと、両方も関心を持っている話題を見つけやすい。逆に、相手の意味が全然理解できないと、もともと持っていた興味がなくなれる。もしチャンスがあれば、日本人と日本語で交際したい。

（留 KP）6月4日（金）に野沢先生英語クラスに行って、英語でコミュニケーションをしていくつもりだったんだけど、英語があまりわからないので、交流はうまくいかなかったと思いました。同時に自分の英語能力は、まだまだ感じを出してきました。やっぱりコミュニケーションをする時、言語が一番大切だ。言語ができないと、何もしゃべれないと思います。ですから、これから英語をうまくするようにならば頑張って勉強します。前回の交流で、英語クラスの学生との交流がうまくなくなったけど、英語の重要性を思い出した。

IV-4-2 ホームクラス活動との関わり

「留学生クラス全員の訪問を受け、リサーチの中間発表を行う」ことに対して日本人学生はかなりの抵抗感を示していた。当日、日本人クラスは7名、留学生クラスは14名とふだんの3倍に膨れた教室は、新しいことへの期待感と不安感、抵抗感が混在していた。発表後のやりとりでは、もっぱら聞き役にまわっていた日本人学生だったが、発表をしたことの達成感と質疑応答のせい、発表後は、総じて留学生の訪問を歓迎し改めて話し合いの機会をもちたいという声があがった。翌週のアンケートでは、留学生の参加を「とてもよかった5」とする学生が7名のうち5名おり、コメントは参考になり（5名）、その後のリサーチに影響がある（4名）と答え、また交流の機会を持ちたい（5名）と答えた。

今回の交流活動がホームクラス活動に与えた影響をリサーチ、プレゼンテーションスキル、コミュニケーションスキルの3つの観点から学生のデータをもとに分析する。

リサーチ

日本人学生のリサーチのテーマはいずれも議論を招き、リサーチ中間発表の際の留学生からは鋭い反応がよせられた。発表後の質疑応答では、日本人学生の一人が、「エキサイティングな会話があったドキドキした」とコメントに記したように、時間が許せば、もっと熱い議論を交わすことができた

であろう。留学生からのコメントは、日本人学生にはよい刺激となったことが記されている。

日本人学生のリサーチ中間発表と最終課題として提出されたりサーチを比べると、留学生との交流活動の影響が見受けられる。ある日本人学生は、留学生とのリサーチ報告会で留学生から得た意見をまとめの中で紹介し、多くの影響を受けたことを表明した。また別の学生は、留学生の指摘から、中間発表では入れていなかった内容を取り入れ、リサーチした。他の学生も中間発表に対する留学生のコメントや留学生との意見交換で少なからず影響を受けたことを事後の感想で述べている。

(HDA) 中間発表をみてもらって、留学生の意見を聞くことができ、今後、何について調べればよいのかを絞ることができた。また自分が調べている問題のことについてなぜそのような問題が起るかや解決するためにはどのようなことに重点を置くべきかなど具体的なヒントの様なものが得られた。複数の国の学生が一緒に何かの問題について議論することは、様々な角度からの意見を聞くことができとても中身のあることだと感じた。

(H BH) 自分の意見の中で「核は必要ない」というものはみんなの共感を得られると思っていたから、「核は必要」という意見の多さにびっくりした。世界へ視野を広げることで全く違う意見が得られてすごく為になった。なかなかない機会だからもう1回ぐらい話し合いや討論がしてみたい。留学生の本心をもっと知りたい。

プレゼンテーションスキル

英語で行ったりサーチ中間発表では、日本人学生はコンピュータのプレゼンテーションツールを使って英語での口頭発表をしたが、発表資料を作るのが精一杯で発表の練習ができないまま当日を迎えた。「オーディエンスを知る」、「声の大きさ」、「アイコンタクトをする」など基本的なプレゼンテーションスキルについて、留学生が率直で直接的な表現で評価、コメントし、日本人学生に対してプレゼンテーションの問題点を伝えた。通常、日本人学生ばかりのクラスでは、評価が甘くなりがちな点であるが、留学生からの指摘はなかなか厳しいものがあり、日本人学生は、率直で厳しい異文化との接触を体験した。参加者の異質度が高いほど、効果的な相互評価が可能となることが窺われる。

(留SH) …言葉の通じない会話をするので、まったく話が進まないで、一人ですらすらしゃべるだけではなく、相手の顔を見て、分かりやすい表現や身振り手振りしながらちゃんとお互いに理解できるコミュニケーションを取ることが大事だと思います。

(H EY) 声が小さいと書かれていたのでちょっと面目がない。「意味がわからない」の一言しか書かない人もいた。正直過ぎないだろうか。前に立つと顔から火が出そうになった。留学生とは話したことがなく、どのくらい日本のことを知っているかとか、日本をどう思ってるのか、中国人や韓国人の価値観等がよくわからなかったので、前に立つ自分と発表をどんな目で見ると不安で腰が引けた。自分がヘタなだけかもしれないけど。もっと少人数での発表会ならよかったかも。

コミュニケーションスキル

日本語で行ったりサーチ報告会は、双方にとって学習言語の運用面やコミュニケーションスキルに影響を与えた。学生のコメントや感想などのデータとしては出て来なかったが、双方にとってコミュ

ニケーションを図ろうとする姿勢を学ぶよい機会であった。日本人学生にとっては、小グループ活動で留学生の多様な日本語の発音や言い換え、聞き返し、質問の仕方、話の聞き方などを含めて積極的な発話態度に触れることができたことは大きい。留学生の日本語使用との接触が、発音や間違いにこだわって消極的になりがちな日本人学生の英語使用に対して影響を及ぼすことが期待される。

〔梶原2003: 101〕は留学生と日本人の「コミュニケーション」という授業で「日本人が留学生と接することで自文化はもとより自分の言語スタイルについて意識するようになっていったことは意義深い」と報告しているが、CCC04春の場合も、日本人学生にとって今回の交流活動は、自分の英語使用場面に思いを馳せるならば、より高い英語力はもとより、コミュニケーション能力、自己表現を積極的に行う態度の大切さを学ぶよい機会となった。

また、リサーチ報告会の使用言語についての指摘が日本人学生側から一切出てこなかったことは、参加者が互いの報告内容に集中したことを示している。言語はコミュニケーションの手段であって、伝えたい内容こそが、豊かでなくてはならないことが実感できたなら、ホームクラスの活動を超越するほどの意義があると考えられる。留学生にとっても、日本人学生と対面して小グループで話すこと自体、日本語の運用面において、日本語学習への動機づけとして意義深いことは言うまでもない。

Ⅳ－４－３ 交流を希求する気持ち

ここでは、学生たちのキャンパスにおける交流の実態と交流に対する気持ちを探ってみたい。事後アンケートでは、CCC04春の交流活動は以下のように参加者から高い評価を受けた。日本人学生7名のうち6名が、「大変良かった5」と答え、留学生12名のうち4名が「5」5名が「4」と答え、さらに、「このような授業をしてほしい」と多くの学生が答えた。では、なぜこの交流活動が受け入れられたのであろうか。以下、3つの観点から分析を行う。

交流への渴望

CCC04春の交流活動が受け入れられたのは、一つには、キャンパス内での留学生と日本人学生の交流が乏しいということが挙げられる。アンケートによると、日本人学生の場合、1名をのぞいて、日頃留学生と交流する機会はないと答えている。そのため交流そのものに対して全員が大きく興味を示し、今回の活動が楽しかったことが述べられている。一方、留学生の方は、交流があるもの7名、ないものが4名であった。そのコメントからは、キャンパスをともにしながらも、なかなか対話する機会に恵まれず、交流が思うように行かない、個人レベルの交流にいたっていないという状況も窺える。

（日 FS）留学生の人たちとこんなに話したのは初めて、というか、外国人の人とこんなに長く話すのは人生で初めてで、とても充実してたし、すごく楽しかったです。

（日 AT）他国の状況や意見を聞かせて欲しい。会話をしたい。

（日 BH）自分の知らない世界が広がる。友達として一緒に普段の生活を共にしてみたい

（日 FS）世間話をするだけでも、得るものは多いと思う。

（日 EY）話しているとカルチャーギャップなどがあって面白い。向こうの文化をもっと知りたい。

（留 ST）課外活動と運動会（では）交流がうまくいけないと思う。

（留）傷をしないで交流を行われる。

（留 HL）今日、中、日、韓の学生が集まり、自分のテーマ（在日外国人、核兵器、外食産業）に対して意見を述べ、相手からの質問を受けながら、自分が思う、そして、自分の国が思っ

いる考えを話しながら（おたがいに）立場を見せた。今まで個人個人の〈交流〉がなかった。（留 II）今回の交流会が楽しかった。普段はなかなか日本人の学生と交流する機会がないから。今回の交流会で自分の関心を持つてゐることも聞けたし、いいたいこととか、伝えたいこともできたと思います。決まってるテーマについてだけじゃなくて、いろんな方面の話ができた。とても勉強になった。これからも、ぜひ今回のような交流会のチャンスを作ってもらいたいと思います

アカデミズムへの欲求

また、学生たちに交流活動が受け入れられたのは、とりわけ、3回目の小グループ活動において、さまざまなアカデミックな関心が喚起され大学生としての知的好奇心が刺激されたことが挙げられる。日常的な交流の中では、互いに興味があっても国際的、政治的な話題について話すことが簡単でないことは容易に想像される。この小グループ活動では、リサーチの報告、質疑応答の後、各グループが自由に話題を展開させた。以下は、学生たちが広範な分野にわたって議論し、相互に学び合えたことが述べられている。

（留 SL）今日は中国と日本に関することを日本人の学生と話し合いました。話題はとても幅が広くておもしろかったと思います。今日は、特に歴史認識と宗教に関してもいろいろなことも話しました。互にみかたがちがうので、問題に対して考え方も違うけど、とても意味があるクラス交流だと思います。

（日 DA）中国の人と日本人のいろいろなことについての意識が違うことを改めて実感した。靖国神社のことも、今日はじめて何が問題となっているのかを知った。水に対しても、なんとも思わずにつかっているけど、水不足が世界の中に実在することも使い方の違いにも驚いた。日本人は、あまり普段から難しいことは考えていない。考えたくないのかもしれない。でも考えなくてはいけないことだと、強く思った。

（日 BH）「へえー」とか「おおー」とかばかり言ってしまった。同じアジアの国として、自分もっていたイメージがあまりに浅すぎたことに恥ずかしいと思った。もっと中国や韓国のことを知りたい。飲みながら話したらすごく充実して楽しいかもしれない。世界に目を向けることはほんの少しでも楽しい。国際学部らしい授業を初めてした気分。またこういうチャンスが欲しいです。留学生の方たちと自分の努力や意欲の差を感じてしまった。留学生は常に世界中の出来事にアンテナをはっていて、情報量が豊富。見習うべき点が非常に多かった。核兵器問題にも国内の事情が多く関わっていることを教えてもらった。実際、徴兵へ行った方からの生の声を聞けてすごくためになった。

（留 RM）日本人の学生と交流したのはよかった。おもしろかった。交流しない前、いつも自分の考えを持っている。他の人がどういうふうに考えるのかわからない。特に、歴史の問題について、現在の日本人がどういうふうに考えるのかわかってほしい（考えているか知りたい）。交流したと（後）わかっている。日中間の歴史教育が違うから、現在の日本人、特に若者が歴史についてよくわからない。逆に、広島原爆、日本が被害者になっている歴史をよく伝えてきた。理解できる。これはどこの国でも同じと思う。愛国主義教育のとき、被害者の立場から考えると、熱くやすい。

「授業」の枠組みを求めて

日本人クラスと留学生クラスのそれぞれの授業活動であるリサーチ課題を2クラスで共有する形で行われたこの交流活動は、学期を通じて準備し、3回の対面を重ねた。このプロセスでは、参加者たちは全体活動と小グループ活動を組み合わせて、次第に互いの顔が見える対話へと導かれていったといえよう。以下は、交流が「授業」という枠組みの中で行われたことから、短時間の間でも心を開くことができたこと、日頃の交流では聞けないことや話せないことも「授業」という枠組みの中だからこそ、自由に述べられたことなどが報告されている。

（日 EY）すぐうちとけられたし、楽しかった。聞きたかったことはみんな聞けたし満足。

（留 YC）今まで日本人に対して、私が思った率直な気持ちを伝えたのは今回が初めてだった。また、私が日本人に対して思ったことを彼女（小グループ活動での日本人学生）も共感しているということも少しはおどろいた。私たちの考えと彼女の考えをお互いに交わすことができたことに意義があったと思う。

（留）果題を決め考えが違う人とも話し合う事。

（留）勉強の雰囲気よかった。

全3回の活動を終えた参加者たちは、最終アンケートの中で、相互交流を実現するこのような授業活動を積極的に求めてきた。以下は、学生たちの「文教大学での留学生と日本人学生の交流についての感想と提言」である。

（留）今まで個人個人の〈交流〉がなかった。国際関係学科で、文教大学はこの授業を見本にするべきであると思う。また、今後、チャンスがあれば、みんなと話してみたいと思う。

（留）せっかく同じ学校の学生でglobal化されている構内だからこそ機会（chance）ではないでしょうか。

（日 DA）大学に来なければ出会えない人々に会えたことはとても大きい。もう少し話し合える授業をもつべきだ。

（日 CH）一つの授業として交流できるものをつくるべきだと思う。

（日 GY）今回の授業のような交流を多く取り入れて欲しい！

（日 BH）国際学部らしい授業だと思った。4年にして初めてドキドキワクワクした内容でした。

（日 FS）この授業で話すことがなければ、今後も交流はなかったかもしれない。けれど、逆に機会さえあればだいたい同じ年代なので交流が深まると思います。

V 結びにかえて—まとめと課題—

CCC04春は、CCC03秋の反省をもとに、交流の深化を求めて、発表内容（テーマ）、活動形態、使用言語と交流活動の流れに留意しながら活動を進めた。その結果、交流の深化が見られ、それぞれのホームクラス活動への影響があり、互いに交流を希求する気持ちが高まったようだ。なかでも、日本人学生側が積極的に交流を求めるにいたったことに注目したい。これは、授業の中で直接、異文化との接触をすることにより、異文化への積極的な態度が促進されたといえるのではないだろうか。

しかしながら、「授業時間内に行われる短時間の『計画された』かつ『人工的』な交流活動は留学

生と日本人学生の親密化のプロセスの第1段階であり認知レベルの域を脱していない」[新倉 1996: 40] ことも多いと考えられ、学生たちが実際の行動にうつることこそが肝心である。CCC04春の交流がよかったとする日本人学生の回答には「その後あいさつや話す留学生が出来たから」「授業以外で会っても話せるようになったので」という記述があった。願わくはこうして授業外で自然な接触を繰り返し、真の対話、交流がなされることを期待したい。

[倉八1999: 144] では、「異文化を知ろうと頭では思うが、どうやったらよいかわからず、実際に何もしていない。授業の中で環境を与えられたらいいと思う」という学生が紹介されている。授業の中で交流活動を行うことは、このような学生だけでなく、交流に興味がない学生をもとり込み、キャンパスでの異文化接触の可能性を広げることができることも見逃せない。

振り返ってみると、CCC03秋ではより留学生が、CCC04春ではより日本人学生が満足を得たと言える。満足度が高かったのは活動内容の主な発表者となった側である。この観点から今後交流活動を行う際には双方の参加者がより主体的になれることを目標としながら、使用言語、事前・事後指導、扱うトピック、時間・回数設定、活動形態などについて検討したい。語学授業の範囲におけるこのような交流活動において「留学生から学べること」、「日本人学生から学べること」は何かを学生とともに体験し、研究を重ねていきたい。

VI おわりに

「留学生と日本人学生の交流時間を少しでも持つことは、授業が活性化し、学生たちの学習言語への学習姿勢や異文化に対する理解が深まるのではないか」という漠然とした思いで始めたこの交流活動も回を重ねてこうしてまたご報告できることを喜んでいる。ことに今回は、留学生との交流が日本人学生にとって意義深いことを学生とともに実感した。留学生は年齢層が幅広く、社会経験もあり、何より大きなリスクを背負って日本に来ているという存在感が日本人学生を圧倒するのであろう。

今回の活動で交流について思わぬほど熱い反応を寄せた学生たちの声に接し、執筆者たちは、学生たちの異文化接触の機会への渴望を感じた。一般教養レベルの語学科目ではあるが、これからも留学生と日本人学生とが対話をする機会を提供し、コミュニケーションする姿勢を育て、自己の確立を図るような授業を模索していきたいと考えるにいたった。大学コミュニティを構成する一員として、学生とともに「留学生がいるキャンパス」ではなく「留学生とともにいるキャンパス」を楽しみたい。日本人学生が留学生と出会い、そして対話することから、英語はツールであって、肝心なのは伝えたい内容、そして自分自身であることに気づき、さまざまな活動に積極的になる。留学生が日本人学生と出会い、深く交流することによって、さらに充実した留学生を送る。国際学部と情報学部とを擁する外の世界に開かれた文教大学湘南校舎は、そんな地球市民としての視点をもった活発な学生たちであふれるキャンパスであってほしいと願っている。

最後に参加してくれた学生のみなさんに感謝します。ありがとうございます。そしてこれからもよろしく。

引用文献

- 浜田麻里;大谷晋也;三牧陽子(他) 2001「実践報告 多文化コミュニケーション能力を養うために——「基礎ゼミナ-」「日本語」乗り入れ授業の試み」大阪大学留学生センター『多文化社会と留学生交流』5 103-111
梶原綾乃2003「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」

『日本語教育』117号 93-102

倉地暁美1998『多文化共生の教育』Change from Within: A New Development for Transcultural Communication 勁草書房 267pp

倉八順子 2001『多文化共生にひらく対話』明石書店 216pp

金城尚美1998 「異文化交流による心的態度の変容——韓国人留学生と日本人学生の合同クラスを通して(研究論文)」沖縄外国文学会『Southern review』No.13 37-54

箕浦康子代表1998『日本人学生と留学生：相互理解のためのアクション・リサーチ』（平成7年度～9年度科学研究費補助金研究成果報告書）

新倉涼子1996 「留学生と日本人学生の相互交流と対人認知の変容—異文化理解授業の実践を通しての考察」『千葉大学留学生センター紀要』3 31-42

杉本妙子1999 「異文化理解のための日本人学生・留学生混成クラスの効果と問題点Ⅱ:外国人留学生に対する教育効果を中心に」茨城大学人文学部編『茨城大学人文学部紀要,コミュニケーション学科論集』5 43-58

鈴木康子・島崎美登里2002「JLPとELPによる国際交流授業：討論とグループ・プロジェクトの試み」『ICU日本語教育研究センター』11 69-78

孫長虹 2004「中国人留学生の日本観」名古屋大学国際文化研究科『多元文化』第4号 217-230

田崎敦子2003「日本人学生の異文化間コミュニケーション能力の養成－英語を共通語として行う留学生とのグループワークを通して－」広島大学留学生センター『広島大学留学生教育』7 45-57

坪田典子・野沢智子 2004 「クラスを超えた学び合い－留学生日本語クラスと日本人学生英語クラス間交流－」『文教大学国際学部紀要』第15巻第1号 117-131

段躍中 2003『現代中国人の日本留学』明石書店 391pp

坪井健1993「在日留学生と日本人学生—何が留学交流を阻害しているか(特集 アジアの留学生)」アジア文化編集委員会編『アジア文化』第18号 アジア文化総合研究所 102-111

坪井健1994『国際化時代の日本の学生』学文社 164pp

徳井厚子 2000 「SCSを利用した多文化クラスの大学間交流授業の試み」『メディア教育開発センター研究報告』14 22-30

矢ヶ崎紀子 2004 「子どもたちの交流」『青少年問題』第51巻2号 10-15

横須賀柳子2003「大学での日本人と留学生の異文化接触」國土館大學教養学会『國土館大學教養論集』第54号21-38